

平成29年度重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）研究発表報告

22th Annual Congress of the European College of Sport Science (ECSS MetropolisRuhr 2017)における研究発表に参加して

中谷 深友紀*

■はじめに

平成29年度重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）の助成により，平成29年7月5日から7月8日までの日程で，ドイツのルールにて開催された22th Annual Congress of the European College of Sport Science（第22回ヨーロッパスポーツ科学学会：以下，ECSSと略す）に参加し，我々がこれまでに行ってきた研究成果の一部を発表する機会を頂いた。本稿では，学会大会の様子および筆者の発表内容について報告する。

■ ECSS について

当学会は，1995年にヨーロッパにおけるスポーツ科学のレベル向上およびスポーツに関する科学的な知識の普及を目的とした国際組織である。現在では約2000名の会員数を擁し，年一回開催される Annual Congress の参加者は約3000名に上る。当学会の Annual Congress は，体力・スポーツ医学分野では世界規模の学会の一つであり，ヨーロッパを拠点とする学会であるにも関わらず，毎年，アメリカ，アジア，オセアニアなど世界中から，スポーツ科学領域の研究者が集い，研究成果の発表および討論が盛んに行なわれている。今回参加した第22回 ECSS 学会においても，学会会場はスポーツ科学を研究領域とする研究者や学生をはじめ，運動指導および実践者等の参加者で非常に盛況であった。本学会大会は，著名な研究者による「Plenary Session」，「Invited Session」，「Satellite symposia」などの講演・シンポジウムや，「Oral presentation」，「Mini-oral presentation」，「Poster presentations」，「E-poster presentations」の一般発

表，協賛企業によるフロアでの実践や体験コーナー等のプログラムが，会期中，8：00から21：00まで行なわれていた。当学会には，日本国内の研究者・大学院生も多く参加しており，研究に関する話はもちろんのこと，語学力の向上に対する取り組みなども情報交換することができ，非常に実り多きものであった。



ECSS 2017 会場（Messe Essen）外観

■研究発表の概要

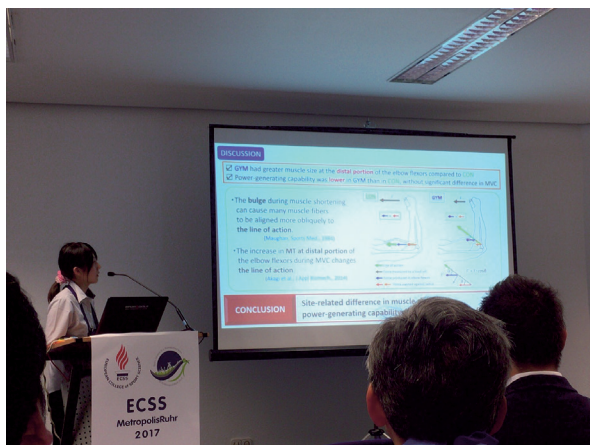
筆者は，学会大会2日目に，Mini-oral presentation（3分間の発表と2分間の質疑応答）にて「Site-related difference in muscle size influences ballistic power-generating capability of elbow flexors」というタイトルで，上腕屈筋群における同一筋内の筋サイズの部位差がバリスティックパワー発揮能力に与える影響に関する研究成果を発表した。競技スポーツは種目によって運動様式が異なる（例えば，体操のつり輪のような持続的な力発揮や走り幅跳びなどの瞬発的な力発揮など）。また，筋力トレーニングによる筋肥大の変化は同一筋内でも不均一であるという報告がある。それゆえ特定の

* 鹿屋体育大学大学院 体育学研究科 博士後期課程3年

種目を長期間実施しているアスリートは、競技種目を反映した特異的な筋形状を有し、それらが競技パフォーマンスを決定するパワー発揮能力にも影響を与える要因となっている。しかし、筋形状と運動様式との関係は明らかにされていない。それらの問題点を解決すべく、本研究では筋形状がパワー発揮能力に影響を与えうるかを検討した。

■おわりに

世界各国から体力・スポーツ医科学分野の研究者が集う当学会大会において、研究の成果を発表したことは、本研究の独自性・意義について国際的評価を受ける良い機会であった。また、学会大会でのプレゼンテーションおよび質疑応答を通して、国際的に活躍している様々な分野の研究者と議論を交わすことができ、今後の研究活動をより充実したものへと発展させる糧となった。今回の国際学会での発表を通して、自身の研究内容に対する理解をより深めることができたと同時に、次の研究のステップに向けて多くのヒントを得た。今回の国際学会でのプレゼンテーションの経験を活かし、自身の研究活動をより実りのあるものにするよう、より一層努力したい。



Mini-Oral Presentation (筆者発表)

最後に、本学会大会への参加・発表を行なうにあたり、ご理解と多大なるご支援をいただきました。本学教職員および共同研究者の皆様に深謝いたします。